

令和7年度 第2回宝塚市総合教育会議

1 日時 令和8年(2026年)1月20日(火)13:00~15:00

2 場所 宝塚市役所4階 特別会議室

3 出席者 (構成員)森市長、赤井教育長、松浦教育委員、石井教育委員、春日井教育

委員、川上教育委員

(関係職員)藤島副市長、管理部長、総括担当及び管理担当次長、教育企画課

長、教育環境整備課長、教育企画課係長

学校教育部長、総括担当及び学校教育担当次長、相談支援担当次

長、教育支援担当次長、青少年センター所長、教育研究課副課長、

教育支援課副課長

社会教育部長

(事務局)企画経営部長、政策推進担当次長、政策推進担当課長、企画政策

課係長

4 内容(議事概要)

■開会

■傍聴

「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」及び「宝塚市総合教育会議運営要綱」のとおり運用することで承認。

■議題の公開・非公開

議題1について公開とすることを諮り、異議無く決定。

■議事

議題Ⅰ「今後の教育行政について」

（川上委員はオンライン出席、オブザーバーとして国際バカロレア教育に関する

説明者（第三者）がオンライン出席）

○森市長

はじめに、今後の教育行政について、教育委員会事務局からの説明の前に、私の方から少し国際バカロレア教育についてのお話をさせていただきたい。まず、今回様々な報道等で、私の方から国際バカロレア教育を進めるといったようなところで、教育委員会の先生方にまずご相談する前に報道が出てしまったことに対して、お詫びを申し上げたい。本来であれば教育委員会の皆さんと相談しつつ、了解をいただいたうえで進めるのが本筋であると思うが、後にそのあたりの事情も含めてご説明をさせていただきたい。教育委員会事務局からも説明があると思うので、そこはよろしく願います。今回は、話題になっている国際バカロレア教育に関して、教育委員会事務局で調査研究を進めているので、そこについて意見交換をしたい。そもそも、西谷地区の幼小中の学校の今後というところで、私自身が理解しているところは、分校がなくなり、統一化された一方で、小規模校であり今後どのように西谷の幼小中を興していくかという議論がある。そこで皆さんご承知のように、小規模特認校として市内多くの方に来ていただき、特色のある教育を進めていく、また西谷の自然、文化などを生かして、小規模特認校としての特色を生かしていくということを進めさせていただき、すでに数名の子どもたちが西谷に南部からも通っているという状況ができてきているところである。私は市長就任前から西谷の特色をもう少し分かりやすい形で出していきたいという旨の相談は聞いており、市長就任後も具体的にどのようなことができるか、いろいろと相談いただく中で、国際バカロレア教育という言葉が出てきた。

また西谷の方からも要望をいただいて、今回、調査研究を進めてみようという流れで研究開始に至った。後ほど管理部長の方から詳細な経緯について説明をお願いする。また今回、国際バカロレア教育について調査・研究を進める中で、オンラインで参加いただいている説明者の方にもいろいろお世話になっており、いろいろ教えていただいているところである。本日は教育委員の皆様にもぜひ内容について知っていただいた上で、意見交換したい。私自身がなぜこのように考えるに至ったかについてもお話しできればと思う。私自身も国際バカロレア教育を経験しているので、そういう意味でも探究教育や国際バカロレア教育について少し説明できればと思っている。

○森市長

（オンライン参加の説明者にあいさつ）

それでは、教育委員会事務局の方から、詳細な経緯についての説明をお願いする。

○高田管理部長

今回、西谷でというところの話の根底になることとして、宝塚市では平成 28 年 3 月に、当時の過大規模校、過小規模校の対応を検討し、方向性を示すために宝塚市立小学校および中学校の適正規模および適正配置に関する基本方針を策定した。これに基づく対応ということであるが、これは既に中山台小学校の統合や宝塚第一小学校、長尾小学校、光明小学校等で現在も引き続き検討を行っている流れの中の一つとして、西谷地域での検討を行っているものである。その検討の根拠となるところが、この基本方針の中の大きな 3 番目にあたり、この方針の中では西谷小学校及び西谷中学校の小規模校の特例と位置づけている。その中では、西谷小学校及び西谷中学校は過去、上佐曽利分校と切畑分校を廃校としてきた経緯や、田園集

落地域で近隣に小学校及び中学校がないことから適正化の対象外とするが、特認校や小中一貫校など学校の特色について研究を進めていくとの規定がある。これに基づき、令和 5 年 11 月に地域保護者、学校の在学者で構成する西谷地区学校づくり検討委員会を設置し、西谷地区の学校の適正化について検討を重ねた結果、令和 7 年度から特認校制度を導入すること、またそれだけでは間口を広げただけで子どもがなかなか入ってこないということから、引き続き教育分野における特色について検討を重ね、令和 7 年 10 月 23 日、11 回目の検討会において、最終的に国際バカロレア教育を学校の特色とすることで、学校規模の適正化を図り、あるいは地域振興につなげたいということの意見がまとまった。その結果、11 月 6 日に西谷地区まちづくり協議会と西谷地区学校づくり検討委員会の連名で市長に要望書が提出されたという経過がある。一方、教育委員会では、この国際バカロレア教育について独自で調査をしている。昨年 8 月 6 日、公立学校で先進的に取り入れている高知県香美市に視察に行った。10 月 12 日、候補校までは行ったものの認定には至っていない備前市に経過も含めて調査に行った。11 月に、先述の意見書の受理したことを教育委員会に報告を行った。11 月 17 日に学校づくり検討委員会で国際バカロレア教育についての調査研究を始めている。11 月 19 日頃から本日参加いただいている説明者と具体的に進めるための手続きを含めいろいろとご相談をさせていただいている。また 11 月 21 日以降、説明者が所属されている機関や文部科学省主催の研修会、学習会にも参加を始めている。高知県香美市に対するさらなる詳細な調査ということで、実際に現場である大宮小学校に教育長を含め視察に行った。同日、説明者が所属されている機関に対して関心校登録の手続きをとっている。その後、12 月に入ってから、説明者と連携協議を進めながら、具体的な研修の計画を立ててきた。12 月 23 日、説明者を招き、教育委員会の幹部職員を中心とする勉強会を開催。最終的に 1 月 7 日に教育委員に対し、これまでの調査結果について報告、その後教育委員会の中でも議論してきたという経過がある。こうした経緯や本日の議論、教育委員の皆様のご意見も踏まえながら、年度内をめどに教育委員会としての一定の方向性、方針をまとめていきたいと考えている。

○森市長

ここからは説明者から国際バカロレア教育についてご説明いただいたうえで、質疑あるいは意見交換を行いたい。説明者からのご説明をお願いします。

(説明者より国際バカロレア教育についての説明および事前質問に対する回答)

- ・国内の導入状況やカリキュラムの概要について
- ・カリキュラム修了後の学びのつなげ方について
- ・教員の負担について

○森市長

ありがとうございました。ここからは少し自由な討議としたい。説明者からは事前質問について一定の回答を戴いたが、その他に関しても教育委員からのご意見、ご質問があれば。

○川上委員

- (国際バカロレア教育導入後、継続的にかかる金銭的なコストについての質問)
- (教育委員会事務局及び説明者からコスト面、職員研修について回答)

○川上委員

(公立校における導入を考えた際、通常の受験に向けたカリキュラムに国際バカロレア教育の要素をプラスしても対応可能かという質問)

(説明者よりカリキュラムの考え方について回答)

○森市長

(補足として、高知県香美市への視察を通じた現行の学習指導要領への国際バカロレア教育の取り入れ方についての意見)

○春日井委員

(国際バカロレア教育と文部科学省が示す学習者像の重複を前提に、公立学校で母語による国際バカロレア教育導入に関するメリットについての質問)

(公立学校で国際バカロレア教育を受けた児童生徒をディプロマプログラムへどのようにつないでいくかについての質問)

(西谷地区で導入する場合に必要な生徒数が集まるのか、また少人数でスタートした場合に学びが深まるのかなど、規模に関する質問)

(進学校のようなスキル教育を望む保護者と、コンピテンシーベースでゆったりと学び方を学びたいと考える児童生徒とのギャップに対する支援についての質問)

(説明者よりそれぞれの質問について回答)

○森市長

国際バカロレア教育について取り組んでいくことで、教育委員会、学校現場、市長事務局が探究教育の目的や教育のあるべき姿について考えるよい機会になると考えている。探究教育を進めるにあたり、それらの取組を国際標準のリソースとして使わせていただくイメージである。また、インター校とIB校は別物であるが、同じものであると誤解されがちである。英語でバリバリ行うことが国際バカロレア教育というわけではないので、国際標準のプログラムを作る中で蓄積されたノウハウを、宝塚の教育を深化させることに使わせていただくことが大切であると考えている。

○春日井委員

宝塚市が幼小中で一区切りとして国際バカロレア教育を推進するということであれば、その先の高校や大学への接続の選択肢についても併せて提案できるようにしておく必要がある。個別最適な学びや国際的な視点でリソースを生かすという独自性と前述の接続性、どちらにも意識を持っておく必要があると考える。

○森市長

おそらく大半の子どもたちは国際バカロレア認定された幼小中課程を修了しても、一般の県立高校などに進学することになるだろうと思っている。ただその中で、探究教育に興味を持ち、ディプロマプログラムを希望する子どもも出てくるのではないかと思う。宝塚市のロケーションは、兵庫県や大阪府においてディプロマプログラムを導入している私立または公立の高校が比較的近くに存在していることから、そういった高校に進学する子どもも出てくると考えている。ただもっと大事なことは、幼少期に植え付けられた探求マインドが、社会人になったときに発揮されることを期待している。

○高田管理部長

視察先の高知県においても、国際バカロレア教育を導入している中学校の卒業生の中で、同じく国際バカロレア教育を導入している県内高校へ進学する生徒はごく一部であり、その他の子どもは周辺の公立高校へ進学するケースが多いということであった。

○松浦委員

（教員の養成に時間がかかるように見受けられることから、全校一斉導入ではなく、学年ごと、教科ごとの導入の可能性に関する質問、説明者からの回答）

○市長

香美市への視察で、全教員が研修を受けることとなっている一方で、カリキュラムを見ると基礎学力をつけるような、いわゆる日本でよくある学習時間も多し。学習指導要領を満たすためにはこの部分も当然必要で、いろいろな探究的側面が加わる一方で基礎学力もしっかりつけなければいけないので、カリキュラムが大きく変わるわけではない。視察先においても従来の指導方法の教員もおり、国際バカロレア教育を導入する過程で、最初から完成するのではなく、研修や教員間での伝達により少しずつ浸透するというイメージである。

○赤井教育長

視察の中で小学校の実際の授業風景を見せていただいたが、2年生だけが総合的な学びとして探究の学びを行っており、他の学年では普通の授業が行われていた。他の学年の教員に、教科書のみに基づいた授業を行っているのかという質問をした際、教科書の単元を満たす前提のもと、いろんな探求に関する話も入れながら授業を組まれていると感じた。また、教員のスキルの面も気になったので、異動についても質問したところ、5年間で約3分の1の教員が入れ替わっているとのことであった。異動してきた教員も研修を受けつつ、その間は既存の教員がフォローする体制で、日々教員自らが学習しながらやっておられる印象を持った。

私自身もどのような授業が探求的な学びとなるか想像することもあり、教員もそれぞれ探求的な学びを考え、実践していると思うが、自分のやり方が本当に正しいかどうかは誰にもわからない。そんな中、長い年月をかけて積み上げられた、国際的な標準プログラムというリソースがあれば、教員も勉強しやすく、力がつけられ結果的に子どもたちに活かせるのであれば、国際バカロレア教育にトライすることも一つの方法であると感じた。

ただ、市長とこの話をした際に最初に申し上げたこととして、コストに関する観点でお話をした。行政にはコスト意識があり、少人数に対してかけるコストと、大部分にかかるコストの両方を意識する必要があり、試行・実験的に事業を始めた場合にも、教育に関する責任を持って、それぞれについてしっかり検討したうえで進めていかなければならないと申し上げた。市長もその点を踏まえたうえで、調査研究から始める、とおっしゃっていただいていると思っている。調査研究とは、我々教育委員会もそうであるし、予算を所管する市長事務部局の企画、財政部門も、何より現場の最前線で教える教員の思いや市民との疎通を図る中で、皆で決めていくと市長も言っていると思っている。

○森市長

フィンランドの専門家が言うように、教育にはいろいろな形があり、上から押し付けられるような教育や人材育成の方針のもと行われるものなど。中でも一番大事なのは、皆さんの学びそのものが教育活動の中から生まれてくるものであり、これを教育現場（特に西谷地域）、教員や教育委員会、予算を所管する市長事務部局の皆と一緒に勉強しながら進めたらよいのではと思う。導入には様々なメリットがあるが、前のめりで押し付けていくのではなく、皆で調査研究し、推進

すべき部分とブレーキをかける部分について教員や子どもたちとの双方向の対話を行いながら考えていきたい。そういう意味でも、単なる行政による調査研究ではなく、宝塚市の教育を大きく変える可能性のあるものとして真剣に取り組みたい。

○松浦委員

西谷地域で国際バカロレア教育を導入するとすると、地域外からの通園通学という交通の課題や移住希望者への住宅確保などの課題が出てくると思われる。こうなると教育行政のみでなく、地域づくり、まちづくりの話になってくる。これらについての取組も同時に走り出すと捉えてよいのか。

○森市長

少なくとも小規模特認校ということをはっきりしているので、南部地域から通いたい子どもがいれば喜んで受け入れる建付けとなっている。ここについては国際バカロレア教育導入の有無を問わず行いたい。移住に関しては市長部局において移住促進プログラムを持っており、西谷地域にお住まいいただける方に対するサポートは地域としても市としても行っている。具体的にはスクールバスとして機能しているバスに関して、今後のニーズも踏まえ都市安全部を中心に取組を進めているところである。医療支援などについても様々行っているところであり、今後移住希望者が出てきたときに、地域の皆さんとも話し合って、支援について個別に対応していきたい。視察先においても教育移住が相当数あったと聞いている。教育・医療基盤の整備は移住者にとって大切な問題であると考えているため、これまで以上に支援に力を入れていきたい。

○春日井委員

今回の話は公立校における国際バカロレア教育導入の宝塚市版について本腰を入れて行う話であると理解している。私学の高校の場合を見てみると、帰国生徒の受け皿となっている場合が多数ある。これは公立校においても可能性としてあるかも知れない。また、特認校ということで、人間関係が苦手な不登校傾向にあり、小人数である西谷であれば、という子どもも排除しないでほしいという気持ちもある。いわゆる優秀な生徒を集めて優秀なモデル校を作るのではなく、海外から帰ってきた子もいれば、生きづらい子もいれば、中には特性のある子もいたり、だからこそ自分のペースで学べ、こだわりを大事にして探究を深めるなど、そういうイメージで行っていたら良いと思う。

もう一点は、やはり導入にはコストがかかり、このコストは国際バカロレア教育を利用する方の個人負担ではなく、行政が負担するという点である。単純に利用していない方との間に不平等感が生まれる。なぜ特定の地域、集団にだけお金をかけるのかという点に説明責任が問われることになると思っている。これに対し、市内の他の地域への波及効果というか、教員の人事も西谷地域で固定して専門家を育てるのではなく、適度な人事異動もしながら、中長期的に国際バカロレア教育の良さを市内全体で広めていくという構想の中での提案である旨説明していくことが大切になる。

○森市長

前段の事に関しては、そこまでは難しいと考えている。海外のインター校に通っていた子は英語をメインとして学校を探しており、その受け皿という方向性ではない。当然学習指導要領に沿った外国語教育としての英語は勉強するが、英語人を育てるのではなく、日本語をしっかりとしながら探究を深化させていくことが国際バカロレア教育導入のメリットだと考えている。

一方、特別支援にしても不登校支援にしても万能ではないので、難しい子は難しいという場合もあると思う。ただ中には国際バカロレア教育によって教育環境が変わったことにより救われ、学校に行けるようになったというケースもあると思う。海外生活が長い子の受け皿というのは正直荷が重く、私立に期待するところである。しかし多文化共生という側面で外国人の方がたくさん入って来られることを考えると、言語理解や日本語が第2言語である方へのサポートなどについては別の形で当然行っていくべきものと考ええる。

後段については、まさしく私もずっとお話をさせていただいているところであり、西谷を1つのフィールドとして、教育委員会や市長事務部局を含め、市全体で学びのあり方を考えていき、その成果を市域全体に還元していくことを考えている。その中では教員の入れ替わりもあるであろうし、学びに関する気づきを南部でも進めていけることを期待している。税金を投入する意義はここにあり、学びを深化させるにあたって拠点とする西谷にもメリットが必要であるし、拠点とするからには生まれたメリットが市域全体へ還元されていくことが大切である。

○川上委員

今後導入にあたっては、ロジスティックス（プロセスの最適化）の部分について市として研究が必要だろうと思う。現行の学習指導要領も対話的、協働的な学びを入れているものの、カリキュラムの全体の学習量をそれほど落とさずに行っている。対話的、協働的に学ばせようと思うと時間がかかるものだが、やるべき量が変わらないという中でやってきた。国際バカロレア教育を導入するとなると教員含めみんなが学びながらアップデートしていくことになるが、指定校や指定校にきた教員のやる気任せにしてしまうと全市的な展開や他校への影響を考えたときにやはり無理が出る。一般的に、少し思い切った施策をロジスティックスなしで行うと、失敗すれば誰も異動希望を出さないような学校になっていく、というようなことになることもある。教員が新しい学びに取り組むことができるロジスティックス、いわゆる校務の見直しや学校の仕事のフローそのものの見直しなどについての研究を並行しないと非常に難しいことになる。従来の仕事は今まで通りやりながら、国際バカロレア教育導入に向けての研究は教員のやる気で頑張れ、ということではいけない。生徒と一緒に国際バカロレア教育を深めていくというプロセスとは別に、どういう工夫をすれば、学びの余裕を作り出せるのかということを、教育委員会が引き取って学びを支える仕組みづくりを考える必要が出てくると思う。宝塚市の子どもたちの学びの傾向からすると、いわゆる覚える詰め込み型の勉強については良いスコアが出ているものの、もうひと伸び欲しいのが探究の部分、つまり関心を持つことや面白みを感じるころだと思う。その意味で国際バカロレア教育が持つ波及効果は大きいと感じるが、その部分を教員のやる気任せにしてしまうといずれ破綻することとなる。繰り返しになるが、ロジスティックスの部分の研究は導入とセットで進めるべきである。

○森市長

まさしくその点については、市長事務部局、教育委員会、学校、教員、あるいは地域を含めてコンセンサスを持って進めていくことが大切になると思っている。どこかのアクターだけが先に進んだり、一方でどこかが後ろ向きであったりすると、途中ではしごを外されるということにもなりかねない。また、当初我々は導入にあたりコンサルの利用を検討していたが、説明者のお話を伺うと、いろいろと相談に乗っていただけということであった。もちろん我々も自ら勉強するが、相談できることは非常に心強い。関係者全員でコンセンサスを取りながら、既に大きな経験を有する説明者と緊密に連携し、川上委員がおっしゃるロジスティックスの面も含め真に必要な部分に投資を行いながら研究を進めることが大切である。

○石井委員

（教員のエージェンシーの観点から、教員へのモチベーションに対する支援についての質問）
（説明者からモチベーション支援について回答）

○石井委員

（市内の教員に対する説明の予定に関する質問）
（西谷幼小中の教員や保護者など地域住民を対象とした勉強会および市内教員を対象とした研究会実施の予定について説明）

○春日井委員

開校に向けたロードマップのようなものは存在するか。教員などに向けて説明する際に、こういったものも必要になるかと考えるが。

○森市長

認証という、相手のあることでもあり、なかなか示しづらい部分がある。まずは調査研究を進める中で、市全体として導入に向けた熱量が高まるかどうか大切である。そのうえで、導入に向けた体制などの話が進んでいくものであり、認証を受けるに足る状態に至るまで何年かかるか、などについては現時点では言及できない。

○赤井教育長

調査研究をどのレベルまで行うのか、という目安はあってもよい。事務局だけが調査研究を行うのではなく、教員においても調査研究が行われる中で、マインドの醸成やモチベーションの高まりなど、いろいろな要素が全て整った時に次のステップに進めると思うが、調査研究を漫然と行うというのによくない。

○森市長

赤井教育長の意見のとおり、漫然と調査研究を行うのはよくないと思う。関係者でいろいろな議論をしながら、導入に向けた熱量が出てくるかどうかを見極めていきたい。今後の基本的な方向として、国際バカロレア教育の推進を念頭に置きながら、調査研究を進めるとともに、市長事務部局、指導主事を含む教育委員会事務局、学校、教員、地域のみなさん、そして広く市民のコンセンサスを得ながら学びの形、ロジスティックスをはじめとする体制についても研究していく、その中でブレーキを踏む必要がある場合もある、という認識でよいのか。（異議なし）

○森市長

議題Ⅰについてはこのぐらいとする。本日の議題はすべて終了した。これにて令和7年度第2回宝塚市総合教育会議を閉会する。

【閉会】